

サンポタシ著『宗義の建立』考

原田 覺

西暦1462/1474年にタシルンポ bKra śis lhun po 寺の第二代座主となったサンポタシ bZaṅ po bkra śis (1410~1478/9)の全集本が洋装1冊本として、最近になって中国で出版された。同全集本の存在と、そこに含まれる著作の題目については、同じく中国で出版した目録により既に明らかとなっており、それ等の目録と全集本は、次の通りである。

西藏自治区文管会布達拉宮文保所編『布達拉宮典籍目録』西藏人民出版社、1990年、No. 00528 (pp. 161~163) ¹⁾参照。

剛堅洛桑土旦・赤列雅培整理『班欽桑布扎西全集』民族出版社、北京、1999年 ²⁾。

目録記載の著作題目と全集本の著作目次を比較すると、全集本に比して目録の題目には略題とすべき題目が幾つかある。更に目録には記載しているのに、全集本には収載していない題目があり、これを列記すると以下の如くである。

[ja 帙] *hJig rten brtan bshag* (11葉); [di 帙] *[gDugs dkar las tshogs] dehi gzuñs chog* (1葉); [bi 帙] *bsTan pa spyihi rnam gshag* (6葉)

この他、目録は末尾に目録 *dKar chag* (2葉) を記載しており、全集本はこれを欠いている。しかし全集本がそれを目次として掲載した可能性も充分にあるであろう。一方、目録の[hi 帙]と[yi 帙]の著作が、全集本では収載順が逆転して[yi 帙]と[hi 帙]の著作の順となっており、著作の題目から見限り[yi 帙]は次の[ri 帙]と同様にガンター[パーダ流の勝樂]五尊 Dril bu lha lña を取り扱う著作であり、目録の順序が適正であると認め得る。

目録に記載している資料は、ポタラ宮殿(布達拉宮)が所蔵していた筆写本 bris pod であることが明らかであり、一方で全集本が如何なる資料を利用して成立したのかについては、何も明示がない。上記した相違点を除くと、目録と全集本は著作の配列順は全く一致している。しかし若し全集本がポタラ宮殿が所蔵していた筆写本を利用せず、他の資料のみを利用して成立したのであれば、後に見るように文面の乱れもある様なので、新たな校訂本が

公になることを期待したい。全集本に付してある民族出版社の出版説明 dPe skrun gsal bśad(p. 2, 11. 3~16)による限り、同全集本の整理、監修者は手元資料が完本でなく、また文面も完全なものでないことを嘆いているので、或はポタラ宮殿の筆写本の存在を知らないとも考え得る。

著者サンポタシの経歴については、目録も簡略に記述している。また全集本の最初にある出版説明には著者の経歴について目録と同程度の簡略な記述があり、また全集本の最後には付録 Zur bkod としてサンポタシの活仏である同全集本の整理、監修者による『偉大な寺廟[である]タシルンポ[寺]の第二[代]の在位者[で]大学者[たる]サンポタシのご世代を保持[し]順次[に]おいでになった[方々]のお仕事などを要略したもの』を収載している³⁾。サンポタシの誕生年は1410年で一致しているが、タシルンポ寺の第二代座主となった年を、目録は53歳1462年とし、全集本は65歳1474年とし、また没年を目録は70歳1479年とし、全集本は69歳1478年として相違している(目録p. 163, 11. 1, 5-6, 7-8: 出版説明p. 1, 11. 2, 12-13, 15: 付録pp. 664, 11. 16~17, 666, 11. 2~4, 9~10参照)。目録と出版説明は記述の典拠を何も示していない一方で、付録は次の三著作を典拠として挙げている。

- 1) 撰政[たる]サンゲギャンツォ Sañ rgyas rgya mtsho(1653-1705)がお造りになった『ガーデン[派]の法[の]起源[たる]黄瑠璃』dGaḥ ldan chos hbyuñ Baidūrya ser po⁴⁾(付録p. 665, 11. 5-6参照)。
- 2) 勝者[で]大学者[たる]ソナムタクバ bSod nams grags pa(1478-1554)の『新旧のカーダム[派]の法[の]起源』bKaḥ gdams gsar rñin gi chos hbyuñ⁵⁾(付録p. 666, 1. 12参照)。
- 3) 偉大なるベンサパ dBen sa pa(1505-1566)のご全書 bKaḥ hbum⁶⁾(付録p. 666, 11. 13-14参照)。

ベンサパはタシルンポ寺の第三代座主のロサンドンドウツプ Blo bzañ don grub である。また以上の典拠の内、2番目の資料の検討が重要の様であるが、拙稿の主目的からは幾分とも外れるので、サンポタシの経歴の検討は別稿を期したい。

拙稿に於ける主題は、論題に掲げた如く、サンポタシがインド仏教思想の宗義に関して著述した著作の検討である。諸種の宗義書の研究は、既に多くの研究者が行っており、またその研究成果を公にしている。著者であるサン

ポタシは、タシルンポ寺の第二代座主という要職にあったとはいえ、彼の宗義書の議論を他のチベット人学僧の宗義書が引用したり、検討したりした用例を現在のところ筆者は何も知らない。その点からするならば、ここに取り上げる著作は、後代に対する重要な影響を何も与えなかったとも考え得るであろう。しかし彼の所属した宗派であるゲルク派の学僧達の著述した宗義書の中で、その表題に明確に宗義という用語を使用した著作としては、現在知り得る限りでは、ここに取り上げるものが最初の著作である⁷⁾。その意味では、ゲルク派の宗義書の見解が確立するに到る経緯を探る為には、この宗義書の内容を明確にして置く必要がある。以上の様な視点を背景として、以下では彼の宗義書の形式と内容の検討を行う。

I. ここに取り上げるのは、目録が[cha 帙]11葉として記載する資料であり、目録と全集本(pp. 41~73)の目次と首題は、共に題名が『宗義の建立[でございます]』 *Grub mthahī rnam gshag* [*bshugs so*]である。一方、尾題の方は次の如くになっている。

『宗義の建立』は経[と密]呪を説く者[たる]サンポタシ(7/8)が組み合わせたものの第六品 *rab byed drug pa* である|| 吉祥|| (p. 73, 11. 7~8)

著作そのものの題名は首題と同一であるが、その著作を更に「第六品」としており、全集の全体を一冊の本に見立てて、各著作をそれぞれ一冊の本の各章として取り扱っている。さて最初に、同資料の首題と尾題を除いた本文の科文と、本文中に閑説する固有名詞あるいはそれに準ずる用語を示すことにより、形式と内容の概略を示すことにする。

帰敬偈(p. 41, 11. 1~4)

そこでここに自[宗と]他[宗]の宗義を説く者達が取捨すべき(5/6)総ての住処は基礎 *gshi* と道 *lam* と結果 *hbras bu* の三つの建立に集まった(6/7)のでそれを論ずることに於いて(p. 41, 11. 5~7)

<1>異教徒の[考え]方 *Phyi rol pa hi lugs*(pp. 41, 1. 7, do., 1. 8~ 44, 1. 10)

<1 1>断滅と説く *Chad par smra ba*[hi][考え]方=最初[の項目]は順[世]派(唯物論者)*rGyañ hphen pa*(*Lokāyata*)であるのだ(p. 41, 11. 8, 9~12)

<1 2>常住と説く rTag par smra ba[hi][考え]方(pp. 41, 1. 8, do., 1. 13~ 44, 1. 10)

<1 2 1>勝論派 Bye brag pa(Vaiśeṣika)(pp. 41, 1. 13, do., 1. 15~ 42, 1. 11)

<1 2 2>数論派 Graṅs can [pa](Sāṃkhya)(pp. 41, 1. 13, 42, 1. 12~ 43, 1. 11)

<1 2 3>弥曼差派 sPyod pa pa/ba(Mīmāṃsā)(pp. 41, 1. 14, 43, 1. 12~ 44, 1. 1): 『歌詠の吠陀 *Sāmaveda*』 *sÑan*(14/15) *dnags kyi rig byed* (p. 43, 11. 14~15); 『攘災の吠陀 *Atharvaveda*』 *Srid sruñ gi rig byed* (do., 1. 15); 『賛歌の吠陀 *Ṛgveda*』 *Nes brjod kyi rig byed*(do.); 『祭祀の吠陀 *Yajurveda*』 *mChod sbyin gi rig byed*(do., 1. 16)

<1 2 4>裸形派(ジャイナ教)gCer bu pa(Digambara)(pp. 41, 1. 14, 44, 11. 2~10): 勝者 rGyal ba(Jina)(p. 44, 1. 7); [偉大な]『量[論]』 *Tshad*(8/9) [chen](do., 11. 8~9: 東北No. 4210~4211, 4216?: 北京版No. 5709~5710, 5717a?)⁸⁾; 『思擇炎』 *rTog ge hbar ba*(do., 1. 9: 東北No. 3856: 北京版No. 5256); 『無垢[の]光』 *Dri med hod*(do.: 東北No. 845: 北京版No. 2064)

<2>自宗 rañ sde[hi]の[考え]方(pp. 41, 1. 7, 44, 1. 11~ 72, 1. 17)

<2 1>自宗の[考え]方に於ける基礎の建立(pp. 44, 1. 11, do., 1. 13~ 65, 1. 14)

<2 1 1>業[と]結果の関係が合理である hthad pa[r]と教示すべきこと(pp. 44, 1. 13, do., 1. 16~ 50, 1. 3): 毘婆沙師 Bye brag(20/21) smra ba(pp. 44, 11. 20~21, 45, 11. 6~7); 『俱舍[論]』根本[頌と]注釈 *mDzod rtsa hgre*(p. 45, 1. 17: 東北No. 4089~4090: 北京版No. 5590~5591); 經部派(經量部)mDo sde pa[s](do., 1. 18); [中観たる或る]自立派[dBu ma] Rañ(45~22/46-1) rgyud pa [kha cig](pp. 45, 1. 22~ 46, 1. 1); 唯心派(唯識派)Sems tsam pa(pp. 46, 1. 2, 48, 1. 14); 大乘の經 Theg chen gi mdo(p. 48, 1. 1); 『攝[大]乘[論]』 *Theg bsdus*(do., 1. 15: 東北No. 4048: 北京版No. 5549); 『攝決擇[分]』 *gTan la dbab pa bsdu ba* (do.: 東北No. 4038: 北京版No. 5539); [中観の]帰謬派[dBu ma] Thal hgyur ba(pp. 48, 1. 16, 49, 11. 17, 22, 50, 1. 2); 『十地の經』 *Sa bcu*

pahi mdo(p. 48, 1. 20: 東北No. 44: 北京版No. 761); 『根本般若(中論)』
rTsa śes(do., 1. 22: 東北No. 3824: 北京版No. 5224); 龍樹 *Klu sgrub*(p.
49, 1. 2); 中観(p. 50, 1. 1)

< 2 1 2 >異熟 *rnam smin* を体験する者 *myoñ*(13/14) *ba po*[hi]の補特
伽羅 *gañ zag* を論ずべきこと(pp. 44, 11. 13~14, 50, 1. 4~ 53, 1. 3): 異
教徒(p. 50, 1. 8); [自宗たる一部の]毘婆沙師[*rañ sde*][*khag cig/gcig*]
(do., 1. 9); 経 *mDo*(pp. 50, 11. 10, 13, 51, 11. 5, 18, 22, 52, 11. 4,
5, 6); [一部の]正量[部](多くの者が尊敬する[部派])*Mañ pos bkur ba*
(p. 50, 11. 12~13); カシュミール *Kha che*[の]毘婆沙師(do., 1. 15); [一
部の]経部(15/16)派(do., 11. 15~16, 19); 『俱舎[論]釈』*mDzod hgre!*
(do., 1. 18: 東北No. 4090: 北京版No. 5591); 清弁 *Legs ldan*(18/19) *hbyed*
(do., 11. 18~19, 21~22); [大多数の]唯心派[*phal che ba*](p. 51, 1. 2);
[中観の]偉大な著作 *Yig cha che ba*(do., 1. 17); 帰謬派(do.); 般若[波
羅]蜜多の経 *Śer phyin gyi mdo*(do., 1. 20); 月称 *Zla ba grags pa*(p.
52, 1. 7); 卷物[/復注?][*Yañ*] *Gri*[/hgre!?](do., 1. 8)

< 2 1 3 >決定すべき基礎[たる]二諦を論ずべきこと=二諦[の]建立(pp. 44,
1. 14, 53, 1. 4~ 56, 1. 22): 毘婆沙師(p. 53, 11. 4, 14); 『俱舎[論]』(do.,
1. 5); 経部派(do., 11. 16, 21); 『釈[量論]』*rNam*(18/19) *hgre!*(do.,
11. 18~19: 東北No. 4210, 4216: 北京版No. 5702, 5717a); 唯心派(p. 54, 1.
5); 中観(pp. 55, 1. 5, 56, 1. 18); 自立派(pp. 55, 1. 6, 56, 1. 6); 帰謬派
(pp. 55, 1. 15, 56, 11. 14, 16, 17); [帰謬[派と]自[立派].*Thal Rañ*(p.
55, 1. 17); 『二諦』*bDen gñis*(p. 56, 1. 7: 東北No. 3881~3882: 北京版、
欠); 経部行の中観派 *mDo sde spyod pahi dbu ma pa*[hi](do., 1. 13);
瑜伽行の中観派 *rNal*(13/14) *hbyor spyod pahi dbu ma pa*(do., 11. 13~
14)

< 2 1 4 >それを決擇する *ñes byed/hbyed* [*kyi*]正量 *tshad ma* を論ず
べきこと(pp. 44, 1. 15, 57, 1. 1~ 65, 1. 14)

< 2 1 4 1 >直接(実際) *dños*(pp. 57, 1. 1, do., 1. 4~ 59, 1. 21): 毘婆沙
師(p. 57, 11. 4, 21); 経(do., 1. 11); 経部派(pp. 57, 1. 22, 59, 11. 6,
13); [大多数の]注疏 *Ṭikka* [*pal che ba[s]*](p. 58, 1. 6); [或る?]唯心
[派]*Sems tsam* [*pa*](pp. 58, 11. 7, 22, 59, 11. 3, 7, 14~15); [唯]知

派 rNam rig pa (p. 58, 1. 19); 中観 (p. 59., 1. 6); [或る]自立派 (do., 11. 6, 9, 14~15); [中観の]帰謬派 (do., 1. 8)

<2 1 4 2>三時の設定[(1/2)やり]方 (pp. 57, 11. 1~2, 59, 1. 22~ 60, 1. 14): 毘婆沙師 (pp. 59, 1. 22, 60, 11. 11, 12): 経[部派と唯]心[派] mDo Sems (p. 60, 11. 2, 4, 9); [中観の]自立派 (do., 1. 9); 帰謬派 (do., 1. 10)

<2 1 4 3>宗義を説く者の区分 dbye ba (pp. 57, 1. 2, 60, 1. 15~ 63, 1. 11): 他宗 gshan (15/16) sde (p. 60, 11. 15~16, 16); 自[宗] (pp. 60, 11. 16, 17, 61, 1. 6, 62, 1. 21); 毘婆沙師 (p. 60, 1. 17); 経部派 (do., 11. 17, 19); 唯心派 (pp. 60, 11. 18, 19~20, 22, 61, 1. 3); 中観派 dBu ma pa (p. 60, 1. 18); 十八部派 sDe (18/19) pa bco brgyad (do., 11. 18~19); 根本の四部派 rTsa bahi sde ba/pa bshi[r] (do., 1. 19); 所取[と]能取[の]同数派 gZuñ hdzin grañ mñam pa (do., 1. 20); 種々無二派 sNa tshogs gñis med pa (do.); 卵[の]半塊[派] sGo ña phyed tshal ba (do., 1. 21); 形相諦実[派] rNam bden [pa] (pp. 60, 1. 22, 61, 11. 1~2, 3, 12); 形相虚妄派 rNam rdzun pa (pp. 60, 1. 22, 61, 11. 2, 4, 12~13); 『釈[量論]』 (p. 61, 1. 7); 法上 Chos mchog (do.); [形相]諦実[派と形相]虚妄[派] [rNam] bden rDzun (do., 11. 9, 10); 顕現諦実派 sNañ bden pa (do., 1. 13); 顕現虚妄派 sNañ rdzun pa (do.); 中観[派] (pp. 61, 1. 14, 62, 1. 2); 帰謬[派] (pp. 61, 11. 14, 20, 62, 11. 4, 7, 11, 12, 14, 16, 17, 17~18, 18, 19, 22, 63, 11. 2, 4, 5, 9~10, 10); 自立[派] (pp. 61, 1. 14, 62, 1. 3, 63, 11. 1, 2, 2~3, 3, 6, 8, 8~9); 経部行の中観派 (p. 61, 1. 15); 瑜伽行の中観派 (do.); 清弁 (do., 1. 16); 智蔵 Ye śes sñiñ (16/17) po (do., 11. 16~17); 寂護 Shi htsho ご父子 yab sras (do., 1. 18); アヴァヤ[一カラグプタ] A bha (18/19) ya [ākaragupta] (do., 11. 18~19); 仏護 Sañs rgyas skyañs (do., 1. 20); 月称 (do., 1. 21); [帰謬[派と]自[立派] (pp. 61, 1. 21, 62, 11. 2, 21); 龍樹 (p. 61, 1. 22); 提婆 De va (do.); [外道たる]順[世]派 [Mu stegs] (p. 62, 1. 12)

<2 1 4 4>それ等の経のお考えを注釈する (2/3) [やり]方 (pp. 57, 11. 2~3, 63, 1. 12~ 65, 1. 14): 四部の阿含 Luñ sde bshi (p. 63, 1. 15); 般若[波羅]蜜多の経 (do., 11. 15, 21~22); 『解深密[経]』 dGoñ [pa ñes] hgrel

(pp. 63, 1. 16, 64, 1. 8: 東北No. 106: 北京版No. 774); 唯心派 (p. 63, 1. 16); 弥勒 *Byams pa* (p. 64, 1. 8); 『経莊嚴』 *mDo sde rgyan* (do.: 東北No. 4020: 北京版No. 5521); 二つの『弁別』 *hByed gñis* (do.: 東北No. 4021~4023: 北京版No. 5522~5524); 無着 *Thogs med* (do., 1. 9); [唯]知派 (do., 11. 9~10); 五部 *sDe lña* (do., 1. 11: 東北No. 4035~4042: 北京版No. 5536~5543); 二種の要略 *sDom rnam gñis* (do.: 東北No. 4048~4049, cf. 4025: 北京版No. 5549~5550, cf. 5526); 世親 *dByig gñen* (do., 1. 12); 八部の品類 *Pra ka ra ṅa sde brgyad* (do.: 東北No. 4026~4028, 4055~4057, 4059~4062, cf. 3995, 4068: 北京版No. 5527~5529, 5556~5558, 5560~5563, cf. 5496, 5569); 龍樹ご父子 (do., 1. 13); 『三昧王[経]』 *Tiñ nie hdzin rgyal po[hi mdo]* (do.: 東北No. 127: 北京版No. 795); 蓮華戒 *Ka* (18/19) *ma la sí la* (do., 11. 18~19); 経部派 (do., 1. 21); [或る]毘婆沙師 (pp. 64, 1. 22, 65, 1. 13)

<2 2>道の建立 (pp. 44, 1. 11, 65, 1. 15~ 72, 1. 9)

<2 2 1>道の捨てるべき障弊 *sgrib pa[hi]*の建立 (pp. 65, 1. 15, do., 1. 18~ 67, 1. 16): 経部派 (p. 65, 1. 18); 毘婆沙師 (do.); 自宗 (p. 66, 1. 1); 唯心派 (do., 1. 10); [中観の]自立派 (do., 1. 15); 瑜(16/17)伽行の中観派 (do., 11. 16~17); [中観の]帰謬派 (do., 11. 19, 22); 『釈[量論]』 (p. 67, 1. 15)

<2 2 2>二つの我(15/16)執 *bdag hdzin* の感受 *hdzin stans* が対境 *don* を認識し了って *ños bzuñ te* 否定する *hgog pa[hi]* [やり]方 (pp. 65, 11. 15~16, 67, 1. 17~ 71, 1. 21)

<2 2 2 1>二つの我執[たる]感受が対境を認識し了ること (pp. 67, 1. 18, do., 1. 20~ 69, 1. 2): [中観の]自立派 (p. 67, 1. 20); 自宗 (do.); 声聞[の]二部[派] *Ñan thos sde gñis* (p. 68, 1. 2); 唯心派 (do., 1. 3); 七部 *sDe bdun* (do., 1. 4: 東北No. 4210~4216, 4218~4219: 北京版No. 5709~5717a); 自立派 (do., 1. 11); [中観の]帰謬(14/15)派 (do., 11. 14~15, 19)

<2 2 2 2>それを否定する(18/19)正理 *rigs pa* を説示すべきこと (pp. 67, 1. 18~19, 69, 1. 3~ 71, 1. 21): 自立派 (p. 69, 1. 3); 帰謬派 (pp. 69, 1. 4, 71, 1. 1~2); 事実師 *dños smra ba[s]* (p. 69, 11. 10, 11, 16); 自[宗] (do., 1. 16); 唯心(8/9)派 (p. 71, 11. 8~9); 『俱生[の]所縁[の]決定』

Ihan cig dmigs nes(do., 1.9: 東北No.4255: 北京版No.5753); 七部(do., 1.10); 無着(do., 1.11); 『攝[大]乗[論]』(do.)

<2 2 3>五つの道(16/17)の実体 *no bo* と[心]相続 *rgyud* に生ずる次第 *rim pa* を説示すべきこと=第三[の項目たる] *gn̄is/gsum pa* 道[の]要点 *gtso* (21/22) *bo* と | それを[心]相続から生ずべき次第を説示すべきこと (pp. 65, 11.16~17, 71, 1.21~ 72, 1.9)

<2 3>結果の建立 (pp. 44, 1.12, 72, 11.10~17)

後序 (pp. 72, 1.17~ 73, 1.2): 主尊[たる]大宝[ツォンカパ=ロサンタクパ] (1357~1419) *rJe rin po che [bTsoñ kha pa Blo bzañ grags pa]* ⁹⁾ (p. 72, 1.18); 偉大な著作 (do., 1.20)

結頌 (p. 73, 11.2~7): サン[ボ]タ[シ] (p. 73, 1.4)

以上が同資料の内容であり、一見して明らかな如く同資料は「自[宗と]他[宗]の宗義」を順序を逆にして順次に論じており、先ず「異教徒」である「他[宗]の宗義」として「順[世]派」と「勝論派」と「数論派」と「弥曼差派」と「裸形派」を取り上げ、各々の「宗義」が「基礎と道と結果」という、チベット仏教の学僧にとって常識である教判の観点から見て、何れも不十分であることを結論づけている。続けて「自宗」の「宗義」を、同じく「基礎と道と結果」という教判の観点から論じており、各々の科文の掲げる主題に対して部派仏教と大乘仏教の各学派が如何なる見解を保持しているかを概説している。後代のゲルク派の宗義書の多くが各学派ごとの思想を、より高い宗義に向けて順次に概説しているのに対して、同資料は主題ごとに各学派の見解を比較対照して、当然のこととして各主題に対する「帰謬派」の見解が最も優れていると結論づけている。

尚<2 2 3>の末尾数字の3が同資料では2となっており、しかも段落を付していないので、この<2 2 3>の本文全体が直前の<2 2 2 2>の本文の末尾部分となっていて、全く<2 2 3>の本文が無いことになっている。しかし上記した如く二種の科文を対照して見ると、科文の「実体」は「要点」を誤読したものかとも考えることができ、文面の出入りはあるものの、内容的にはほぼ同一の文意であると認めることが出来るので、同資料は<2 2 3>の本文を保存していることになる。

II. 同資料の全体の現代語訳を示す紙幅はないので、以下では筆者の興味

に応じて選択した科文の本文に対して検討を加えたい。それに先立って、以下に検討を加える〈2 1 4 3〉を除外した本文から読み取り得る、インド仏教の各学派に対する著者の位置づけを先ずは確認しておく。著者が「自宗」として度々言及する学派のうち部派仏教に属するのは「毘婆沙師」と「経部派(経量部)」であり、別に「声聞[の]二部[派]」と総称するのも、この両部派であるはずべきであろう。この両部派の内「毘婆沙師」については、別に「一部の毘婆沙師」或は「カシュミール[の]毘婆沙師」或は「或る毘婆沙師」という言及をしており、著者は「毘婆沙師」の間に見解の相違があると理解していたことを示している。同様に「経部派」に関しても、別に「一部の経部派」という言い方をしている。「経部派」の間にも見解の相違があると理解していたことを示している。更に部派仏教に属する「一部の正量[部]」の見解を示して「正量[部]」にも見解の相違があると理解していたことを示している。また本文中に閑説する「四部の阿含」そのものとしては、周知の如く現存のチベット大蔵経には存在せず、ただ「四部の阿含」を構成する各種の単経が入蔵している。この「四部の阿含」は実在した釈迦に最も近接した釈迦の言行録であり、チベット仏教が「四部の阿含」を保持していないことは、インド仏教が釈迦の生涯を解釈する思想的実践の体系であり、学僧達は歴史的に実在した釈迦にこだわり続けて釈迦の実存的本質を追求し続けたのに対して、日本を含めた諸外国の仏教がそうである様に、チベット仏教がインド仏教を基礎とする宗教的実践の体系であり、学僧達は絶対的存在である仏陀に対する信仰に基づいて自己の実存的理念を追求した事実を、或る意味で象徴的に示している。

さて大乘仏教に属する学派としては「唯心派」と「中観[派]」があり、その内「唯心派」は別に「[唯]知派」とも言及しており、更に「大多数の唯心派」或は「[或る?]唯心派」という言い方をしているので「唯心派」にも見解の相違があると理解していたことを示している。また「唯心派」の論師として「二つの『弁別』」の著者である「弥勒」更に「五部」と「二種の要略」の著者である「無着」と「八部の品類」の著者である「世親」に言及している。また同じ「唯心派」である法称 Chos kyi grags pa の著作である「七部」への言及もある。一方「事実師」に関して筆者の知る所は何も無いものの、本文を見ると「事実師により鏡[の]中のその映像は(10/11)諦[として]無[いもの]bden medと通達されるのか通達されないのか」(p. 69, 11. 10-11)が問題となっており、ここ

では仮に「唯心派」の別名としておく¹⁰⁾。

「中観[派]」の論師として「龍樹」への言及があり、更に「龍樹ご父子」という言い方で提婆への言及もある。「中観[派]」を「自立派」と「帰謬派」に大別し、この内「自立派」には「或る自立派」という言い方があり、また「自立派」を更に「経部行の中観派」と「瑜伽行の中観派」に区分している。一般に「経部行の中観派」の論師に数える「清弁」と「瑜伽行の中観派」の論師に数える「蓮華戒」の見解も取り上げている。一方「帰謬派」に関しては、その最も重要な論師である「月称」の名前を挙げている。以上に概観したインド仏教の各学派に対する著者の位置づけは、大枠として後代のゲルク派の宗義書の多くの位置づけと同様であり、以下では<2 1 4 3>の全文を現代語訳することにより、その詳細を検討する。

<2 1 4 3>第三[の項目たる]宗義を説く者の区分は| 一般に宗義を説く者に於いて他(p. 60, 11. 15/16)宗と自宗[の]二[宗]に確定したうえ| 他宗の区分すべき要略を説示し終わり(16/17)且つ| 自宗について区分すべきであるならば無限であるけれども| 毘婆沙師と| 経部派(17/18)と| 唯心派と| 中観派と[で]四に確定したうえ| 詳細に区分したならば十八部(18/19)派である| 要略すべきであるならば根本の四部派に集まり了る| |

経部派と唯心(19/20)派[の]二[派]に於いて| 所取[と]能取[の]同数派そして| 種々無二派[そして]| (20/21) 卵[の]半塊[派]と[いう]等の区分を或る者が為すけれども| 全てに(21/22)共許 grags pa なのは| 唯心派に於いて[は]形相諦実派と| 形相虚妄派[の]二[派]として(60-22/61-1)共許であるうえ| そ[の]二[派]の差別としては| 形相(行相) rnam pa が諦 bden pa[r]であることに同意する hdod pa のが形相諦実(1/2)派でありそして| 形相が虚偽であること brdzun pa[r]に同意するのが形相虚妄派であるそして| 或る者により言説(世俗)として tha sñad(2/3) du 外界 phyi roi の対境を承認する khas len pa[hi]唯心派に対して形相諦実[派で]そして| 言説(3/4)としても外界の対境を承認しない[唯心派]に対して形相虚妄派であることに同意される等[の]或る多数[の者]が(4/5)生じたならばまた| 彼等は論争[の]基礎(有法) rtsod

gshi[hj]の形相が了解されていない過失 ñes pa であるのであるうえ| (5/6) 自[宗の考え]方は| 根識 dbañ ses に獲得されるように顕現するもの rag par snañ ba は論争[の]基礎の形相であるのであって| (6/7) [何故ならば]『釈[量論]』から| 獲得される[ように]顕現[するもの]は有るのでないのでありそれ等そのものは| |と[言うこと]そして| 法上(7/8)が| 駱駝と言われるものの枝分かれした角 rva zeñ/ziñ ñe ba は無いけれどもと説示したが故にである| (8/9) [形相]諦実[派と形相]虚妄[派]の対境はまた根識に[獲得されるように]顕現するものの如くに成立したのか成立しなかったのか grub ma grub を区分する byed/hbyed けれども| 一切の法(9/10)が諦として成立したのか成立しなかったのかについて伺察する様なことは[形相]諦実[派と形相]虚妄[派の]どちらか一方の| (10/11)者により同意される| |例えるならば根識に獲得されるように顕現するものの如くに諦として成立(11/12)したことに同意するのは形相諦実派[で]そして| [根識に獲得されるように]顕現するものの如くに[諦として]成立しなかったことに同意するのは形相虚妄(12/13)派であるのだ| 或る者は顕現諦実派と顕現虚妄派であるとも同意する| (13/14)

中観に於いて[は]帰謬派と自立派[の]二[派]に確定するうえ| 自立派(14/15)に於いて経部行の中観派と| 瑜伽行の中観派が二つの他(15/16)[派]として有るうえ| [何故ならば]最初は| 阿闍梨[たる]清弁と智蔵(16/17)等であるのであるうえ| 彼達は言説として外界の対境を承認し且つ|(17/18) 阿頼耶[識]kun gshi は同意されない| 第二は| 阿闍梨[たる]寂護ご父子と| アヴァ(18/19)ヤ[一カラグプタ]等の方々であるのであるうえ| 彼等は言説として[も]外界の対境を承認せず(19/20)且つ阿頼耶[識]を承認するが故にであるのだ| |帰謬派は| 仏護(20/21)と| 月称等であるのであるうえ| 彼(月称)から区分された[帰]謬[派と]自[立派の]両(21/22)派がまた聖者[たる]龍樹と| 聖[なる]提婆のお考えはこれであるのだと論争(61-22/62-1)するのであるのだけれども| その二者が正量として同意するものは差別が無い|| (1/2)

然らば[帰]謬[派と]自[立派]の差別は如何様であるのかと[いう]ならば| 或る者は中観を基礎に為し了って(2/3)から| 因由 rtags と立宗

dam bcahなどを承認するのが自立派[で]そして| それ等を(3/4)承認しないのが帰謬派であるのだ[と]言うのは合理でないのであって| [何故ならば]帰謬派が因由を(4/5)承認するが故にであり| 比[量]rjes dpag を承認するが故にである| 前に説示した如くに(5/6)正量に比[量]と| 聖教の正量(経言量)luñ gi tshad maと| 比喩を近接して称量するdpe ñer hjal ba[hi]正量(比喩量)(6/7)を承認するうえ| その後の]両者は比[量]であるのだ| |

他にも帰謬派が(7/8)隠蔽と為った(隠蔽分の)lkog tu gyur ba[hi]所称量gshal byaを称量するhjal ba[hi]正量を承認しないことに[帰]謬するthal| [何故ならば]比量rjes dpag(8/9) tshad maを承認しないが故にである| [従って、その合理でない主張に]同意するならば隠蔽と為った所称量を称量する(9/10)正量を承認しないことに[帰]謬する| そしてまた[その合理でない主張に]同意するならば所称量[たる]隠蔽分lkog gyur[の]基礎が成立し了(10/11)らないうえ| [その合理でない主張に]同意するならば| 帰謬派は正量と所称量の建立[の]同意の[やり]方が(11/12)外道[たる]順[世]派と相応すること mtshuñs pa[r]に[帰]謬する| [何故ならば]帰謬派により正量はまた(12/13)現前[量]mñon sum一つであることに同意され| 所称量はまた自相rañ tshan/mtshan一つであることに確定することに(13/14)同意されるが故にである|

他にも帰謬派により対境[たる]一切の有情の(14/15)為に仏が獲得されるべし| と[いう]立宗が無いことに[帰]謬する| [その合理でない主張に]同意する(15/16)ならば| 帰謬派が菩提に心を発したことが無いことに[帰]謬する| 他にも|(16/17) 帰謬派は宗義を説く四者の中の一つのものでないことに[帰]謬する| [何故ならば]帰謬(17/18)派の宗義は無いが故にである| |それに依るならば帰謬派は宗義を説く(18/19)最善の者であるのだと承認し了ってから| 帰謬派に於いて承認する宗義(19/20)等は無いと説く[その]ことは| 自己自身で矛盾した建立が解らない(20/21)罪惡 mtshanを説くことであるのだ|

自[宗の考え]方に於ける[帰]謬[派と]自[立派]の差別は| 前に説示(21/22)した帰謬派の八つの差別(殊勝)法khyad chos brgyad poを承認することであるのであるうえ| 全て[の人々]に於いて随順する mthun

(62-22/63-1) pa[r]と共許であるのは| 自立[派]の因由を承認するの
 かないのか khas len mi len に於いて区分すること byed/hbyed pa
 であるのであるうえ| それは(1/2)また自立[派]の因由と[いうの]はまた|
 帰謬[派]の能立因とそれ(帰謬[派])が放棄した自(2/3)立[派]の能
 立因 gtan tshigs[とで]二[つの能立因]と為された byas pa[hi]自立
 [派]の能立因ではないのであって|(3/4) [何故ならば]その様な能立
 因は帰謬派が承認するが故にであり| それを承認しない[khas] mi len
 ならば(4/5)以前に説示したそれ等の過失が生起するが故にである| 然
 らば帰謬派の(5/6)[考え]方に於いて自立派が承認する自立[派]のその
 能立因は何様なもので(6/7)あるのであるかと[いう]ならば| 所成就
 bsgrub bya[たる]自己の性相 rañ gi mtshan ñid により成立したもの
 grub pa を成就する sgrub pa[hi]能立因は|(7/8) 自立派の能立因で
 あるのであるうえ| それは自立派が承認するものであるのであって|
 [何故ならば]自(8/9)立派が自己の性相により成立した法を承認するが
 故にである| それを帰謬(9/10)派が承認しなくて| [何故ならば]帰謬
 派が自己の性相により成立した(10/11)法を承認しないが故にである|(11
 /12)

上記の第一段落と第二段落をテキストは一段落としているが、ここでは上記
 の段落分けに従って、各段落の内容を検討する。先ず第一段落では「根本の
 四部[派]」を「毘婆沙師」と「経部派」と「唯心派」と「中観派」の「四に確定」した
 上で、更に「詳細に区分したならば十八部[派]である」としている様に理解で
 きる。しかし周知の如く仏教学一般では「十八部[派]」とは小乗十八部を指し
 「根本の四部[派]」とは同じく小乗十八部の内の主要な部派である上座部と説
 一切有部と正量部と大衆部を総称する用語である。原文に混乱があるのか否
 か、判断すべき材料は何も無い。ここでは「宗義を説く者」として上記の「四
 に確定」した各学派が「自宗」の最も主要な学派であると、後代のゲルク派の
 学僧達と同様に、既に著者が考えていたであろう点のみを確認しておく。

第二段落は「唯心派」の概説であり、最初に「経部派と唯心派」の両派に「所
 取[と]能取[の]同数派」と「種々無二派」と「卵[の]半塊[派]」の「区分」がある
 とするものの「全てに共許」であるとは認めておらず、認めているのは「形相

諦実派」と「形相虚妄派」である¹¹⁾。「形相諦実派」を「形相(行相)が諦であることに同意する」と定義し「形相虚妄派」を「形相が虚偽であることに同意する」と定義した上で、その定義とは異なる「形相諦実派」に対する「言説(世俗)として外界の対境を承認する」という定義と「形相虚妄派」に対する「言説としても外界の対境を承認しない」という定義は「形相が了解されていない過失である」として、この後者の二種の定義を否定する。更に「形相」を「根識に獲得されるように顕現するもの」と定義し『釈[量論]』と「法上」の言葉を典拠として挙げる。そして、その両派は同じく「対境はまた根識に[獲得されるように]顕現するものの如くに成立したのか成立しなかったのか」を問題とするとした上で「一切の法が諦として成立したのか成立しなかったのか」の問題については「例えるならば」とはしながらも「形相諦実派」が「根識に獲得されるように顕現するものの如くに諦として成立したことに同意する」とし、一方「形相虚妄派」が「[根識に獲得されるように]顕現するものの如くに[諦として]成立しなかったことに同意する」とする。段落末尾では「或る者」が「形相諦実派」を「顕現諦実派」とし「形相虚妄派」を「顕現虚妄派」とする見解を紹介している。

第三段落は「中観派」の学派区分であり、段落末尾で「中観派」の開祖である「龍樹」と「提婆」の名前を挙げてその両者、或は「帰謬派」と「自立派」は「正量として同意するものは差別が無い」とすると共に、文脈は必ずしも明確ではないが、その「中観派」は「月称」により「帰謬派」と「自立派」に「区分された」とする。そして「自立派」を更に「経部行の中観派」と「瑜伽行の中観派」に区分した上で「経部行の中観派」の論師として「清弁」と「智蔵」の名前を挙げ、その宗義を「言説として外界の対境を承認」する点と「阿頼耶[識]は同意されない」点に求めている。また「瑜伽行の中観派」の論師としては「寂護ご父子」即ち「寂護」と「蓮華戒」を挙げ、更に「アヴァヤ[一カラグプタ]」の名前を挙げ、その宗義を「言説として[も]外界の対境を承認」しない点と「阿頼耶[識]を承認する」点に求めている。一方「帰謬派」の論師として「仏護」と「月称」の名前を挙げ、その宗義にはここでは何も触れていない。

上記の第四段落から第七段落をテキストは一段落としており、確かに第四段落以降は「帰謬派」と「自立派」の「差別は如何様であるのか」を主題としている。第四段落では最初に誤った定義として「自立派」は「中観」の見解に立った

上で「因由と立宗などを承認する」とし「帰謬派」は「因由と立宗などを」「承認しない」とする定義を示し、著者はその定義を否定する。その根拠として「帰謬派」が「因由を承認し「比[量]を承認する」とする。更に「前に説示した如くに」と断った上で「帰謬派」は「正量」として「比[量]」と「聖教の正量(経言量)」と「比喻を近接して称量する正量(比喻量)」を「承認する」とし、ここも文脈は必ずしも明確ではないが「そ[の後の]両者」である「聖教の正量」と「比喻を近接して称量する正量」も「比[量]」であるとして、結局「帰謬派」は「正量」として「比[量]を承認する」と結論づけているかに理解できる。しかし「前に説示した如くに」と断ったにもかかわらず、上記の内容に明確に対応する議論は不明であり、唯2141の末尾で「比[量]は一切[の人々]が承認するうえ|(19/20) [帰謬派が]同意する[やり]方はまた大部分[の人々]に随順すること明らかであるうえ| 名目を施設すること *miñ hdogs pa* は相似しないことが沢山ある|」(p. 59, 11. 19-20)としており、これが対応する議論であるならば「名目を施設すること」の内容が上記の「帰謬派」の「承認する」三種の「比[量]」であることになる。

第五段落は続けて同じく「帰謬派」は「正量」として「比[量]を承認する」ことを別な議論で論ずる。即ち「比量」を「隠蔽と為った(隠蔽分の)所称量を称量する正量」と定義し直し、更に「所称量[たる]隠蔽分[の]基礎」と規定することにより、もし「帰謬派」が「比量」を「承認しない」ならば「現前[量]」のみを「承認する」こととなり、それでは「帰謬派」は「正量」として「現前[量]」のみを「承認」して「所称量」として「自相」のみを「承認する」「順[世]派」と同一になってしまう過失に陥ると批判する。即ち「帰謬派」は「正量」として「現前[量]」と「比量」を「承認する」と著者は主張していることになる。

第六段落は「帰謬派」が「立宗」を「承認しない」とする定義を否定する。即ち「帰謬派」が「立宗」を「承認しない」ならば「帰謬派」には「一切の有情の為に仏が獲得されるべし」という「立宗」或は「菩提に心を発」という「立宗」がなく、或は「宗義」そのものが「立宗」として無いと言う過失に陥ると批判する。逆に言えば「帰謬派」はこれ等の「立宗」と「宗義」を「承認」していることとなる。

第七段落は第四段落での設問である「帰謬派」と「自立派」の「差別は如何様であるのか」という自問に対して「[帰謬]派と[自]立派の差別」は第一に「前に説示した帰謬派の八つの差別(殊勝)法を承認する」か否かであるとする。

この「八つの差別法」とは<2 1 1>の末尾にある以下の記述の内容を指す。

[それに依るならば]帰謬派の[考え]方に於いて| 崩壊したもの shig pa を事物 dños po[r]であると成就すること[と]| [声]聞[と]独[覚]ñan rañ の(17/18)法の無我 bdag med が通達されることが有ると成就すること[と]| 諦[として]執 bden hdzin[することを]煩惱を具えたこと(煩惱障)ñon moñs can と(18/19)成就すること[と]| 外界の対境を有ると成就すること[と]で]成就することは四方面である| 阿頼耶[識]を(19/20)否定すること[と]| 自証 rañ rig を否定すること[と]| 他[から]生じること gshan skye を否定すること[と]| 言説としても自己の(20/21)性相により成立したことを否定することと[で]| 四つの通用しない方面 hgag phyogs bshi であって| その八つ[の差別法]は(21/22)帰謬派の宗義の根本であるのであるので| 細々した宗義等と|(49-22/50-1) 中観の典籍等それを八つ[の差別法]の何であれ探究の支分に(1/2)結合し了ってから説示[し]知るならば帰謬派の宗義の究極的な能力が出現したもの(2/3)であるのであって| 本当に得難い|| (pp. 49, 1. 17-50, 1. 3)

以上の「八つの差別法」は当然ツォンカパが主張する八項目であるはずであるにもかかわらず、本来三項目である「否定」の「方面」を四項目とし、同じく本来五項目である「成就」の「方面」を四項目とし、ツォンカパの主張の第三項目と第八項目を落として、代わりに「数論派」の主張を否定するかの様な「他[から]生じること否定すること」という項目と、それに続けて「言説としても自己の性相により成立したことを否定すること」という項目の計二項目を加えている(注9参照)。これが著者の独自の見解であるのか、或は原文に混乱があるのか否か、判断すべき材料は何も無い。但し第七段落では直ぐに続けて「全て[の人々]に於いて随順すると共許である」こととして「帰謬派」が「自立[派]の因由を承認するのকাশないのか」を問題としており、上記の「自己の性相」とツォンカパの主張の第三項目に関連する議論を展開する。尚ツォンカパの主張の第八項目については、著者は「<2 1 4 2>三時の設定[のやり]方」で議論している。

さて第七段落は続けて「帰謬派」が「自立[派]の因由を承認するのকাশないのか」という課題に対して、ここも文脈は必ずしも明確ではないが、最初に

「帰謬派の能立因」と「それ(帰謬[派])が放棄した自立[派]の能立因」という「二[つの能立因]」があるのではなく「その様」に区分けした場合の「自立派」の「能立因は帰謬派が承認する」とし、また「その様」な場合の「自立派の能立因」を「帰謬派」が「承認しない」ならば「以前に説示したそれ等の過失が生起する」とする。その「過失」とは上述の第四段落から第六段落の議論を指すと考え得る。更に「帰謬派の[考え]方に於いて」と断った上で「自立派の能立因」は「所成就[たる]自己の性相により成立したものを成就する能立因」であると定義し、その論拠として「自立派」は「自己の性相により成立した法を承認する」と規定する。それに対して「帰謬派」は、その様な「自立派の能立因」を「承認しない」とし、その論拠として「自己の性相により成立した法を承認しない」と規定する。以上の議論は、上記したツォンカパの主張の第三項目の主張内容とは必ずしも一致しない面があり、これが著者の独自の見解であるのか、或は原文に混乱があるのか否か、判断すべき材料は何も無いので、具体的な比較対照はここでは控えることとする(注9参照)¹²⁾。

Ⅲ. 以上に見てきた如く、後代のゲルク派の宗義書と比較すると、同資料は学派の位置づけに関しては「四に確定」した各学派が「自宗」の最も主要な学派であるとしており、後代の宗義書の位置づけが、既に確立していると考える。一方、形式としては全体を「基礎と道と結果」という教判の観点から論ずると共に、各々の科文の掲げる主題に対して仏教の各学派が如何なる見解を保持しているかを概説しており、これが同資料のみの特例であるのでない限り、後代の宗義書の形式とは少しく異なっていて、まだ宗義書の形式は一定していないと為し得る。また内容に関しては、著者の独自の見解であるのか、或は原文に混乱があるのか否か、判断すべき材料は何も無いので、内容紹介に止めて、多くの場合に判断を保留してきた。この点については今後の研究を俟ちたい。更に内容に関して筆者が興味を持った別の科文である<2 2 2 2>の冒頭部分を紹介しておきたい。即ち以下の一文である。

<2 2 2 2>第二[の項目たる]それを否定する正理を説示すべきことに於いて| 自立派の[考え]方と(3/4)帰謬派の[考え]方[の]二[つの考え]方]があり| 最初(自立派の[考え]方)に於いて| 実体について伺察すること[たる]一と多[から]離れた gcig dañ du(4/5) bral [因由と]| de /| 原因 rgyu について伺察すること[たる]金剛[の]屑の因由 rdo rje

gzegs mahi rtags[と]| 結果について伺察すること[たる]有[と]無
 [が]生ずる[ことを]否定する yod(5/6) med skyes/skye hgog[因由
 と]| 原因[と]結果[の]兩者について伺察すること[たる]四辺[から]生
 ずる[ことを]否定する mu bshi skye bral/hgog[因由と]| 実体[と]
 原因[と]結果[の] (6/7)一切について伺察すること[たる]縁起の因由 rten
 hbrel gyi rtags と[で]五 bshi/lña[種類]であり | (p. 69, 11. 3~7)

以上の記述は「二つの我執[たる]感受が対境を認識しること」を「否定する
 正理」として、中観派の五大能立因 gtan tshigs chen po lña である「一と多
 [から]離れた[因由]」と「金剛[の]屑の因由」と「有[と]無[が]生ずる[ことを]
 否定する[因由]」と「四辺[から]生ずる[ことを]否定する[因由]」と「縁起の因
 由」の五種類の「正理」を示し、以下ではその五種類を一つずつ解説する導入
 部分である。但し、恐らく無頭字体 dbu med で書いたテキストの、原文で
 は最初の「因由」末尾の句の区切り記号 chig śad であるものを de と読み誤
 って、上引の一文の直後に最初の「因由」の解説が始まっているにもかかわらず
 「五[種類]」ではなく、最初と二番目の「因由」を一つに数えて四種類と表記
 しており、明らかに誤りである。更に問題なのは、上記の如く「自立派」の
 「五[種類]」の「因由」としながらも、以下の記述に於いて「帰謬(1/2)派の[考
 え]方に於いて」(p. 71, 11. 1-2)とした上で、四番目と五番目の「因由」の解
 説を行っていて、この二つの「因由」が「自立派」の「因由」ではないとするかの
 如くである点である。ここでも、これが著者の独自の見解であるのか、或は
 原文に混乱があるのか否か、判断すべき材料は何も無いので、判断は差し控
 えなければならない(注12参照)。ただ一言するならば、資料を複製本ではな
 く校訂本(?)として出版するに当っては、慎重に過ぎる必要はないけれども、
 やはりそれなりの慎重さが必要となる。

注記

- 1) Bod rañ skyoñ ljoñs rig dños do dam u yon lhan kañ gi Po ta la rig dños
 sruñ skyob do dam soho ed. : [Shva ser bstan pañi sgron me rje Tsoñ kha
 pa chen pos gtsos skyes chen dam pa rim byuñ gi] gSun̄ hbum dkar chag
 [phyogs gcig tu bsgrigs pañi dri med zla śel gtsañ mahi me loñ shes bya
 ba bshugs so], Bod ljoñs mi dmañs dpe skrun khañ, Bod ljoñs, 1990. 尚

チベット語のローマ字転写に、パーリ語用のフォントであるVriROmanCを借用した
為に、不足の活字がある。ローマ字に付した下線は、チベット語のローマ字転写
の下点を意味する。

- 2) Gañ can blo bzañ thub bstan hphrin las yar hphel ed.: *Pañ chen bZa'i po bkra śis kyi gsuñ hbum*, Mi rigs dpe skrun khañ, Pe ciñ, 1999.
- 3) *Chos sde chen po dpal bKra śis lhun po^{hi} khri thog gñis pa pañ chen bZa'i po bkra śis kyi sku^{hi} phreñ ba hdzin pa rim byon gyi mdzad rnam mdor bsdus*であり、同全集本のpp. 662~682に収載している。尚サンポタシに関しては同pp. 664, 1. 16~ 666, 1. 26に記述している。
- 4) Z. Yamaguchi ed.: *Catalogue of The Toyo Bunko collection of tibetan works on history*, The Toyo Bunko, Tokyo, 1970, cf. No. 352A-2621, 352B-2622.
- 5) Gonpo Tseten ed.: *Two histories of the bKa' -gdams-pa tradition from The Library of Burmiok Athing, Palace Monastery, Gangtok, Sikkim, 1977*, cf. No. 1.
- 6) 昨年2002年、中国チベット自治区ラサから、パンチェンラマI-Ⅷ全書42巻を出版する予告があったが、現在筆者未入手である。尚ベンサパは同全書のI世として名前が挙がっており、2巻の分量の様である。
- 7) K. Mimaki: *Blo gsal grub mtha'*, Zinbun Kagaku Kenkyusyo, Unibersité de Kyoto, Kyoto, 1982, cf. pp. 7, 11.
- 8) 東北は東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録・総索引』仙台、1934(昭和9)年の仏典番号であり、北京版は『[影印北京版]西藏大蔵経[総目録・総索引]』165~168、(財)鈴木学術財団、東京・京都、1961(昭和36)年の仏典番号である。
- 9) 袴谷憲昭「中観派に関するチベットの伝承」『[国訳一切経印度撰述部、毘曇部第二十五卷月報]三蔵』117、(株)大東出版社、東京、1976(昭和51)年；拙稿「チベット仏教の中観思想」『[講座・大乘仏教 7]中観思想』(株)春秋社、東京、1982(昭和57)年、参照。
- 10) 張怡蓀主編『藏漢大辞典』民族出版社、北京、1985年の dños po smra ba の項は事実師とし、対応する学派を特に指定していない。王沂暖主編『佛学詞典』青海民族出版社、西寧市、1992年の dños po grub pa の項は前記と全同であり dños smra ba の項は説事派とし唯識派の別名とする。Duñ dkar blo bzañ hphrin las: [*mKhas dban*] Duñ dkar [*blo bzañ hphrin las mchog gis mdzad pa^{hi} Bod rig pa^{hi}]* tshig mdzod chen mo [*Śes bya rab gsal shes bya ba*

bshugs so], *Kruṅ goḥi Bod rig pa dpe skrun khañ*, Pe cin, 2002の *dños smra ba* の項は中観派以外の毘婆沙師と経部派と唯心派などの総称とする。尚、本事典は末尾に年表 *reḥu mig* を掲載している。

- 11) 袴谷憲昭「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒沢大学仏教学部論集』7号、東京、1976(昭和51)年は各学派を主客同数論、多様不二論、一卵半塊論、形象真実論、形象虚偽論としている。
- 12) 拙稿「シャーキャチョクデン著『了義の海に入る十分な伺察の[大]船』考」『[木村清孝博士還暦記念論集]東アジア仏教——その成立と展開』(株)春秋社、東京、2002(平成14)年、参照。